

おくのほそ道『旅立ち（序文・漂泊の思ひ）』定期テスト対策問題（解答・解説編）

解答・解説

1. 解答：月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、来ては去り去っては来る年もまた旅人である。 解説：「百代の过客」は「永遠に旅をしてゆく旅人」の意。「行きかふ年」は過ぎては来る年月。冒頭の名句で、人生を旅にたとえる主題を提示している。中国・李白の「春夜宴桃李園序」の一節「光陰は百代の过客なり」をふまえた表現。
2. 解答：毎日が旅であって、旅そのものを自分のすみかとしている。 解説：「栖（すみか）」は住む場所。船頭や馬子のように、生涯を旅の中で送る者は、旅を日常の住まいとしている、という意味。
3. 解答：あてもなくさまよい歩きたいという思いがおさまらない（やまない）こと。 解説：「漂泊」はさすらい歩くこと。「やまず」は「止まず＝おさまらない」。旅へ出たいという抑えがたい思いを表す。
4. 解答：馬のくつわを取って旅をし、年老いていく者、すなわち馬子（馬方）のこと。 解説：直前の「舟の上に生涯を浮かべ」は船頭を指し、これと対になって、生涯を旅の中で過ごす職業の人を例に挙げている。
5. 解答：疑問を表す係助詞。「か」が文中にあるため、結びは連体形となる（係り結び）。 解説：「いづれの年よりか（…旅に出たいと思い始めたのだろうか）」と、自分でもはつきりしない気持ちを疑問の形で表している。「か」は疑問・反語を表すが、ここは疑問。
6. 解答：イ（接続助詞「て」） 解説：「心にかかり」という連用形に接続し、上下の語句をつなぐ接続助詞。完了の助動詞「つ」の連用形「て」とは異なる。
7. 解答：旅人。（通り過ぎて行く客の意から、旅人。） 解説：「过客」は「過ぎゆく客＝旅人」。「百代の过客」で「永遠の旅人」となる。
8. 解答：ちぎれ雲。空に浮かんで漂う一片の雲。 解説：風に誘われて漂う「片雲」に、定めなくさすraitたい自分の心を重ねている。
9. 解答：「そぞろ神」＝人の心を何となくそわそわと落ち着かなくさせる神。「道祖神」＝旅の道中の安全を守る、村境や道のほとりにまつられる神。 解説：いずれも旅へと誘い立てる存在として描かれ、旅心がかき立てられて落ち着かない様子を表している。「そぞろ」は「何となく・わけもなく」の意。
10. 解答：旅の疲れを防ぎ、足を丈夫にする（健脚を願う）ため。 解説：「三里」は膝の下にあるつばで、ここに灸をすえると足が丈夫になり旅によいとされた。旅支度の一つとして描かれている。
11. 解答：西行・宗祇・李白・杜甫など、旅の中で生涯を送り、旅先で亡くなった昔のすぐれた人々（とくに歌人・詩人）を指す。 解説：冒頭の「人生は旅である」という主題を受け、芭蕉が理想と

した風雅の先人たちを念頭に置いている。自分もその先人たちにならって旅に出たいという思いにつながる。

12. 解答：「月日」と「行きかふ年」／「百代の過客」と「旅人」。解説：「月日は百代の過客にして」と「行きかふ年もまた旅人なり」が同じ構造で並ぶ対句。時の流れを旅にたとえる表現を二重に重ねている。

13. 解答：(a) 季語＝「雛（雛の家）」、季節＝春。(b) 自分が住んでいた草庵を人に譲ったところ、新しい住み手が移り住み、雛人形を飾るような華やいだ家になることだ、という情景。住み替わりの感慨と、旅立つ自分との対比がよまれている。解説：「雛」は三月の雛祭りにちなむ春の季語。これまで世捨て人の草庵だった家が、家族のいる明るい家へと変わることへのしみじみとした思いと、旅立ちの感慨が込められている。

14. 解答：(a) 松尾芭蕉、(b) 江戸時代（元禄期）、(c) 俳諧紀行（俳諧紀行文）。解説：『おくのほそ道』は元禄2年（1689年）の旅をもとに芭蕉が記した、俳句（発句）をまじえた紀行文。俳文・俳諧をともなう紀行文学の代表作。